

生徒理解を深める心理・適応6尺度の構成と妥当性の検討

○ 西本素江¹・清重友輝²・中塚善次郎²

(¹徳島市城西中学校・²ひびきのさと人間精神学研究所)

1 目的

我々は生徒理解を深める心理・適応6尺度を構成し、その心理・適応6尺度が如何なる実際の妥当性をもつかを検討することを目的とする。

2 方法

調査対象 中学2年生215名（男子97名、女子118名）。

- ① 項目分析によって各尺度10項目からなる生徒理解を深める心理・適応6尺度を構成する。
- ② 内田クレペリン精神検査を全員に実施し、曲線類型判定10群の上位判定集団と下位判定集団について心理・適応6尺度との関係を見る。
- ③ 学力テストの成績上位集団と下位集団について心理・適応6尺度との関係を見る。
- ④ 生徒指導上問題のある生徒の結果について検討する。

3 結果とその考察

構成された6尺度とは、1) 他者・社会定位尺度、2) 家庭適応尺度、3) ストレス尺度、4) 内的自己確立尺度、5) 学校・教師適応尺度、6) クラス・仲間適応尺度からなる。尺度はそれぞれ10の質問項目からなる。それぞれの α 係数は、1) 0.825、2) 0.937、3) 0.845、4) 0.787、5) 0.798、6) 0.835。

内田クレペリン精神検査曲線類型判定の上位判定集団とその下位判定集団では、他者・社会定位尺度及び内的自己確立尺度では差はみられないが、下位判定集団は、上位判定集団に比べ、適応が悪くストレスが高い傾向が見られた(図1)。内田クレペリン精神検査は、能力も含め精神機能全般の働き方を表していると考えられる。

学力テストの成績上位集団に比べ下位集団では、家庭、学校・教師適応が悪く、ストレスが高

く、内的自己確立も悪かった(図2)。

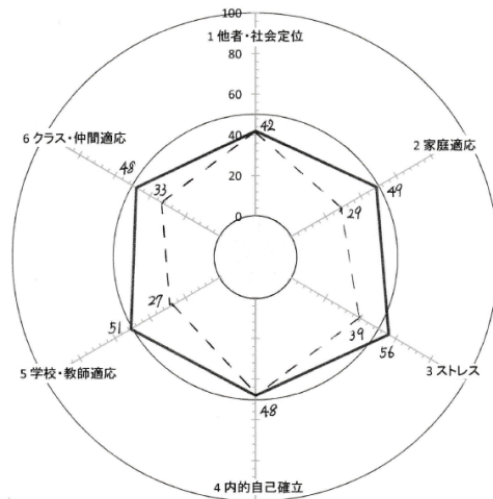


図1 クレペリン上位判定(実線)と下位判定(点線)の比較

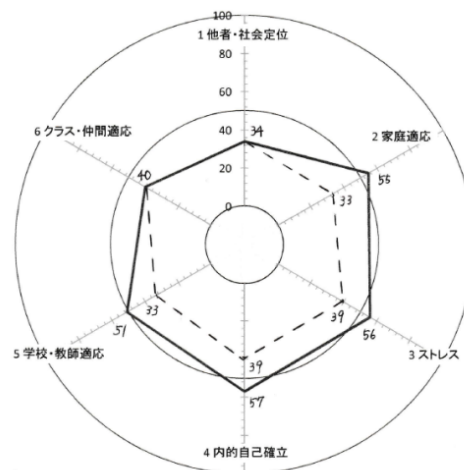


図2 学力テスト成績上位(実線)と下位(点線)の比較

問題生徒A(男)のプロフィールは、他者・社会定位は低く、学校・教師や仲間に定位しておらず、家庭に定位している状況が映しだされ、日頃の観察によりAの性格や行動特徴をよく表していると考えられる。また、一見良い生徒のプロフィールに、学校・教師適応または仲間適応が低くストレスが高い状況が表れた。これに基づいて教師が話を聞く時間をとり、指導につなげる可能性が考えられる。